

◎とき

令和7年

11/22^土

13:00開会(12:30会場)

第47回

山形市 民俗芸能公演会

◎ところ

蔵王コミュニティセンター

山形市蔵王半郷 1028

電話 023-688-2120

第63回県民芸術祭

令和7年度 山形市芸術祭参加



休石老酒盛保存会



鹿楽招旭踊保存会



成澤田植踊保存会



蔵王上野神楽保存会

蔵王芸能保存会(松尾ばやし)

【出演団体】

- 蔵王芸能保存会 ●休石老酒盛保存会 ●鹿楽招旭踊保存会 ●成澤田植踊保存会
●蔵王上野神楽保存会 (友好出演) ●桜田大黒舞保存会

主催／山形市民族芸能連合保存会

後援／山形市

山形市芸術文化協会

蔵王地区連合町内会

第47回

山形市民俗芸能連合保温会

山形市民俗芸能公演会

◎司会進行
奥山簡子
(人形劇団とんとん)

あいさつ 山形市民俗芸能連合会会長 高橋 光正
祝 辞 山 形 市 長 佐藤 孝弘
祝 辞 蔵王地区連合会会長 池野 勇男

1 松尾ばやし ●蔵王芸能保存会 代表 斯波忠悦

『寄席太鼓』『相の山』『きりん』『箱根』『かつこ』『道中うさぎ囃子』『道中馬鹿囃子』

[笛] 斯波忠悦 佐藤将晃 折原康雄 小鷹聡志

[三味線] 斎丸義夫 斎丸ひとみ 斯波好志美 斯波和子 佐藤ひろみ 斎藤洋子

斎藤奏映 斎藤映生 [太鼓] 子供10名

★松尾願人踊りと同じく、蔵王半郷に伝わるものです。祭りばやしの一種ですが、今に残る"ふるさとのオーケストラ"であったといえます。三百年前の元禄の頃、京都生まれの願人が、全国をまわって、半郷の地に足をとどめたことに始まります。願人とは、僧形の大道芸人でした。そして、数年にわたって、若者には「願人踊り」を、娘たちには「はやし」を教えたのが起こりと申します。しかし、伝説であって、裏付けに乏しかったのですが、松尾観音堂の前に立っている燈籠の銘から次のことが判明しました。それは、元禄14年5月17日におこなわれた役ノ行者千年忌大法要に、はじめてからの芸能を奉納したようです。

そうすれば、芸能の歴史は、300年の長きにわたることになりますが、異説もないわけではありません。

★80年ほどまえまでは旧6月17・18の両日、観音様の例祭のとき、若者のひく屋台の上で演奏してきました。京都の「祇園ばやし」をしのばせる典雅なもので、七曲を伝えています。さすらいの願人によってまかれた種子が、すくすくと芽ばえ、蔵王山麓の半郷の地に深く根をおろして、今日に至ったことを思えば、まことに感慨深いものがあるではありませんか。

2 休石老酒盛 ●休石老酒盛保存会 代表 斎藤啓子 (他 10 名)

演目 休石老酒盛

出演 [舞踊] 斎藤啓子 斎藤富美子 斎藤邦子 斎藤友子

斎藤良子 斎藤裕美 斎藤洋子

[唄い手] 斎藤喜美 村岡のぶ子

東山古謡 老酒盛
元禄 休石老酒盛保存会
振付 鈴木 英夫
鈴木 頼子
一、何時か 何時かと
待たれば 夜の間
何時か 休石
水音 持た
二、此の御酒は
何んの 御酒だと
思ひます
今永世の
加賀の菊酒
三、だんぶり注いだの
皆うめば
思ふ所願が
皆叶う

★老酒盛の発祥起源は、今を遡る事、千三百年前の奈良時代です。その頃の物流は、日本海舟運が主で、酒田を寄港とする出羽の国への積み荷は、小鵜飼い船に移して、最上川を遡り、各船着き場に陸揚げされ人馬に依る運搬となり、隣国との公益の為に、二口峠越えの業者達は、山麓の出羽の国・高瀬を宿場と定めておりました。

★歌詞にある加賀の菊酒も、そのルートを辿り搬入されたものです。当時高瀬では点在する民家に跡継ぎ娘の誕生を知らせると、祝賀に参集する女衆には、生家より加賀の菊酒が振る舞われ不老長寿と子孫繁栄を願う「老酒盛」を共に歌い、喜びを分かち合う慣わしが有りました。母系制度を色濃く残し、母から娘に、現代では姑から嫁に、伝承は受け継がれています。

★生業緩ぶ事無き山郷に、生きる喜びを謳歌した先人の証を、休石老酒盛保存会は、今日に伝えております。

磐司の伝説もなつかしい

3 鹿楽招旭踊

カラオギアサヒオドリ

(山形市指定無形民俗文化材)

●鹿楽招旭踊保存会

代表 宇治川金雄 (他 20 名)

演目 『鹿楽招旭踊・長幕 (本幕)』

出演 [大獅子] 宇治川雄大 [前獅子] 宇治川金雄 海谷克則

[中獅子] 宇治川正弘 宇治川万也 [雌獅子] 海谷文明 石山勝美

[笛] 井上 博 三瀬伸江 宇治川慧美 丸子和美

[太 鼓] 海谷一夫 石山勝司 今野美香子 [唄] 海谷一夫

[旗持ち] 宇治川嵩士 [掛け声] 井上清市 [世話人] 村上顕雄

★由来 慈覚太師円仁が貞観二年 (860 年) 1160 年ほど前の事こと、山寺立石寺の開山にあたり、地主神 (マタギ頭領) 磐司磐三郎と対面し (山寺に對面石と言う石があり、その石の上で話し合ったといわれている。) 寺領を譲り受け、殺生を禁じたことにより獣たちが喜んで其の喜びを踊りに表したものとされています。

★猪たち一同が円仁さんにお礼に伺った処、それは磐司が許してくれたのだから、まず、磐司にお礼をなさいとさとされたことで、磐司祭では、最初に磐司の祠の前で奉納の舞を行うこととされています。

★鹿楽招旭踊とは、高瀬地区平石水に伝わる、通称山寺のシシ踊りと言われています。それは、着用している着物に山寺立石寺の紋 (梶の紋) を背負っているからです。踊りは旭踊りという名の通り、旭が昇るがごとく元気の良い踊りです。

★保存会は、昭和 22 年ころ復活 (現保存会の親父たちのころ) 昭和 39 年に山形市無形民俗文化財として指定を受けています。現保存会は、昭和 51 年ごろから活動しています。

4 成澤田植踊

(山形市指定無形民俗文化材)

●成澤田植踊保存会「葛城団」

代表 長岡兵利 (他 16 名) 着付け 西村三三子

演目 『お正月』 『そうりのや』 『やんさのさ』 ほめ言葉 『まいよのえ』

出演 [中太鼓] 長岡幸男 [源内棒] 荒井新一 伊藤政義 板垣啓子

[早乙女] 菊地茂光 山田耕治 沼澤春樹 長岡兵利

[大太鼓] 菊地和助 [小太鼓] 齋藤和子

[唄い手] 鏡 啓 齋藤道夫 [篠笛] 菊地延子

★成澤田植踊りは、南村山郡系と云われ、上山方面から伝承されたと伝えられています。明和 5 年には谷柏村で踊った記録があり、江戸時代の中期には定着していたと思われます。

★昭和初期頃から「葛城団」を名乗り、いろいろ活躍しましたが昭和 4 年山形旭座で実施された県素人演芸大会において見事一位を受賞しました。

★戦争中は中断していましたが、昭和 27 年、時の青年団が昭和初期に大活躍した先輩の指導を受け再興しました。

★公演は不定期でしたが、昭和 58 年から成沢八幡神社で五穀豊穡を祈念し元朝奉納しております。現在は後援会に励まされ活躍中です。

5 蔵王上野神楽 ●蔵王上野神楽保存会 代表 寒河江和男

演目 『神楽獅子舞』『さんぼ舞』『おかめ舞』『鐘馗舞』

出演 [神楽獅子舞] 金子克美 [後被り] 志鎌 茂

[さんぼ舞] 前田正子 [おかめ舞] 寒河江和男 [鐘馗舞] 池野勇男

[三味線] 民謡三味線桂木会 [すり鐘] 池野勇男 [太鼓] 白田綾子 [唄] 志鎌 茂

★山形の神楽とは元々御前舞から始まり、最上義光公が山形〇大神楽初代太夫に禄高を与えるとの事でありましたが、これを辞退し代わりに城下の家中廻りを願い出、義光公はこれを許可し、現代まで続いた門廻りの始まりと伝えられております。当時、上野区では七代目高橋清助家（現十三代）において〇大神楽太夫諸氏に宿を提供し、又、御神楽を信心し協力致しました。ところが、その頃上野区内に災難が有り、災難一切無き様にと守護神として夫婦獅子の内、雄獅子を高橋家に奉納したと伝えられております。しかし、その後、高橋家の蔵に百八十余年、日の目を見ず現代に至りました。

★蔵王上野神楽保存会の発足は、高橋清助家に伝わる獅子頭を末永く郷土民俗芸能として伝承保存していこうと有志が集まり、山形〇大神楽の絶大なる協力を得て始められたもので、発足から約半世紀に至ろうとしております。



《友好出演団体》

6 桜田大黒舞 ●桜田大黒舞保存会 代表 高橋純子

演目 『桜田音頭』『桜田大黒舞』

出演 高橋純子 塩野真美子 塩野克子 塩野さち子 小嶋けい子

沼沢由美子 松本和子 佐藤美好 丹野千恵子

大黒舞は農業の神様、そして福の神として全国的に信仰され芸人達はきれいな衣装を身に着け、嘉祝の言葉を述べながら、家内安全・五穀豊穡などを願い門うけて廻ったのが始まりだそうです。桜田でも昭和の初期頃、踊りが流行り踊ったと聞いております。

その後戦争で途絶えましたが、戦後素人芸人の方などにより復活させ、村の親睦をはかり桜田大黒舞として名をはせた時もありました。しかし後継者不足から自然と消滅してしまいました。

その後区画整理が始まり、次第に村も発展し記念館なども完成し、それを期に先輩の方々が元氣なうちにと再び指導を頂き、振り付けも少しアレンジしたのが、現在の桜田大黒舞です。